追悼

赤松先生を偲ぶ

琉球大学医学部保健学科国際地域保健学分野客員研究員
琉球大学大学院医学研究科衛生学・公衆衛生学講座　元准教授　等々力　英　美

赤松隆先生が亡くなられて、もう３ヶ月が過ぎ去りましたが、まだどこかであの、「よう、どうしている」という人なつっこい微笑に、出会えそうな気がする昨今です。「南風」に、先生への追悼の一文を奏することになるなど、夢想だにしなかったことですが、当時を知る講座スタッフで残っているものは私一人となってしまいました。私の脳裏には、先生との７年近くのおつきあいを通した日々が、走馬灯のように駆け巡っています。私の心に刻まれた思い出のいくつかを追想して、先生への哀悼の意を表したいと思います。

先生は、昭和８年に生を受けられました。その後、先生の少年時代は急速に戦争の時代に突入致しましたが、敗戦後、慶應義塾大学医学部を昭和34年３月に卒業され、その後、米国アルバニー医科大学麻酔学教室臨床講師を経て、昭和37年慶応義塾大学医学部外科学教室助手、昭和44年同教室講師に着任されました。昭和46年に、創設されたばかりの琉球大学保健学部成人保健学講座の初代教授として赴任されました。昭和58年に琉球大学医学部医学科保健医学講座（現 衛生学・公衆衛生学講座）の初代教授として、就任されました。その間、沖縄労働基準局労働衛生指導医としてご活躍され、琉球大学医学部医学科衛生学・公衆衛生学講座の礎を作られました。平成２年に、杏林大学医学部公衆衛生学講座教授として移られ、平成11年３月に定年により退任されました。

私が先生と初めてお目にかかったのは、保健医学講座が創設されてから３年目に助手として採用されてからでした。当時、医学部は病院が建設途上で基礎系講座が順次整備されているときで、保健医学講座内の人員や設備がようやく整ったところでした。

赤松先生は、公衆衛生学と労働衛生学を柱とした広範囲な研究をされていました。例えば、保健学部時代には、沖縄における長寿性について、高齢者を対象に生体指標、特に血清アミノ酸との関連性を中心に研究をされていました。医学科に移られてからも、佐敷町（現、南城市）における地域住民健診を、杏林大学公衆衛生、故古見耕一教授（赤松教授が保健学部時代の助教授）と20年近く継続されました。小生も沖縄に赴任したばかりでお手伝いをさせて頂きました。当時は、佐敷町の各字の公民館に赴きましたが、今から約40年前のことで、当時は、冷房もない木造の古い公民館が多く、真夏に２週間実施されました。私は、東京から赴任したばかりで、強烈な印象として残っています。しかし、この経験で、当時の沖縄における公衆衛生の一端を、赤松先生から学ぶ機会を頂いたことは、貴重な経験として、今も生き続けています。

赤松先生の研究上のご関心は、多岐にわたっておられましたが、その一部について述べますと、今でいうデータサイエンスの一環で、バイオデータを、当時の大型計算機を用いた多変量解析をいち早く行われていました。特に、長寿者の生体情報と生活習慣病指標との関連性に取り組まれておりました。かつては、沖縄は長寿性研究がさかんでしたが、先生は健診データなどからみて長寿性の危機について、我々に指摘されておりました。現在の沖縄の現状から鑑みて、その先見性に敬意を表したいと思います。

当時の全国の医学部では衛生学と公衆衛生学の２講座が普通でしたが、琉大医学部は１講座で担当することになって、助教授（今の准教授）の先生は、病休で不在の状況で講座の立ち上げは、大変だったと思います。特に、１回生は、先輩もおらず、教員も手探りの状態で、講義実習は互いに手加減のない直球勝負の連続でした。その意味で、当時の卒業生は、強く印象に残っておられるのではないでしょうか。

こうしたことから、大学教授という枠にはまりきらない、スケールの大きい先生の生きざまは、たぶん、現実と理想が、いつも背中合わせになっているのだという気持ちが漂っていたように思います。

赤松先生を喪って、精神的支柱を外された私には、新しい場面に向かっていく時代は大きく転回している感じです。過ぎ去りつつある時代に限りない惜別の想いをこめつつ、先生のご冥福をお祈りいたします。

追悼

赤松隆先生を偲んで

～とても個性的ですが学問には厳しい先生でした～

医療法人慶友会人間ドック健診センター長　石　川　　守（２期生）

赤松隆先生の訃報の接し、心からお悔やみ申し上げます。コロナ感染拡大の影響を受け、ご葬儀にも参列することを許されず、奥様から頂戴した郵便物でのみ、知ることしかできなかったのは誠に残念です。コロナ感染症の第１波の際に、公衆衛生の大切さをご教示頂いたことを昨日のように思い出します。

赤松隆先生は、我々２回生の学年担当もされていた先生ですが、琉球大学医学部医学科が創設される以前保健学部の頃から、沖縄県の公衆衛生に専念されていらっしゃいました。今でも思い出しますのは、各保健所の所長さんが、我々公衆衛生の講義にいらっしゃった時に、とても親密に交流され、地域の予防医学への取り組みをお話しされていた事は今でも記憶に残っております。又米軍の医療施設との交流会でも流暢な英語でお話しされていました。残念ながら当時の私の語学力では半分も理解することができませんでしたが。地域との交流も大切にされ、ロータリークラブにも足しげくお通いになっていらっしゃいました。

私と赤松先生の初めての衛生学公衆衛生学教室での出会いは、今でも鮮明に覚えております。私が医学部２年生の昭和55年当時は、医学部生個人が、コンピューターを所有することは不可能な時代でした。ワープロがまだ全盛期ですが、講師の先生から手ほどきを受け、コンピューターに馴染む練習をしている時に、赤松隆教授がコンピューター室に入っていらっしゃり、「君は誰だ？」ととても厳しいお顔をされていらっしゃいました。「医学科２期生の石川です。コンピューターの練習に来ております」とお答えすると、とてもニコニコしたお顔になり、「そうか学生が教室に出入りすることは大歓迎だよ。どうだ、夕食でも食べて行くか？」と気さくに話しかけてくださいました。その時は今でも覚えていますがBig1のセールで買ったボンカレーでした。教授自らがお米を研ぎ、炊飯器に講師の先生と３人分のボンカレーを中蓋と上蓋の間に入れ、「どうだ！これならいっぺんにお米も炊けて、ボンカレーも温められて効率的だろう！」と得意げなお顔をされていました。沖縄のホームセンター巡りが大好きでした。Big1とメイクマンが特にお気に入りで、何度も誘われました。工具と食べ物が特にお気に入りで、ご自分で納得のいく買い物ができると「どうだ石川君、これ安いだろう？」と、とても満足な笑顔を見せて頂きました。

学問に関してはとても厳しい指導を受けました。「石川君、いいかい、医師の仕事の評価は論文をどれだけ書いたか、なんだよ！いっぱい論文を書きなさい」と日頃から強調されていらっしゃいました。現状の自分の論文数を数えると、とても申し訳ない気持ちでいっぱいです。赤松教授のご指導の下、公衆衛生・衛生学等の雑誌に学生時代から投稿させて頂いておりました。今のエクセルが出る以前から、データー処理、効率的な表計算の為の下処理を実際のデーターを使いながら、熱心にご指導も頂きました。

まだまだ赤松先生との思い出は語り尽くせませんが、心から赤松隆先生のご冥福をお祈りいたします。

◆赤松　隆先生

略　歴

昭和33年３月	慶應義塾大学医学部卒業
昭和34年７月	米国アルバニー医科大学麻酔学教室臨床講師
昭和37年４月	慶應義塾大学医学部外科学教室助手
昭和38年４月	足利赤十字病院外科医員
昭和39年４月	群馬県伊勢崎市立病院外科副部長
昭和44年４月	慶應義塾大学医学部外科学教室講師
昭和46年４月	琉球大学保健学部成人保健学教授
昭和47年５月	国立琉球大学保健学部成人保健学講座教授
昭和52年４月	沖縄労働基準局労働衛生指導医（平成３年まで）
昭和58年４月	国立琉球大学医学部医学科教授（保健医学講座）
平成２年４月	杏林大学医学部公衆衛生学教室教授（平成11年３月まで）
平成４年４月	杏林大学医学部附属看護専門学校校長（平成６年３月まで）
平成11年７月	杏林大学医学部衛生学公衆衛生学教室客員教授（平成15年３月まで）
令和４年４月２日	ご逝去